

トップは語る

東北のイノベーションとともにさらに会社を躍進させて

株式会社 TTK 代表取締役社長

土肥 幹夫 氏



創立より60年近い歴史を持ち、確かな技術力とサービスで、東北の情報通信インフラ構築の一翼を担う株式会社TTK。地域貢献の意識も高く、仙台国際ハーフマラソン大会への協賛、安全安心パトロール活動、植樹や街の清掃・美化活動などにも積極的に取り組み、地元の信頼も厚い。東日本大震災から1年半、復興へと歩みを進める東北を底辺から支えながら、太陽光発電システムなど新たな事業展開にも着手し、日々挑戦を続けている。

どいみきお／1952年生まれ。東北大学卒業。1976年日本電信電話公社（現NTT（日本電信電話株式会社））入社。電気通信工事の現場をはじめ、さまざまな業務を経験し、2006年にエヌ・ティ・ティ・コミュニケーションズ株式会社取締役カスタマーサービス部長就任。2009年株式会社TTKに入社し、専務取締役モバイル事業本部長を経て2010年代表取締役社長就任。好きな言葉は「誠実」。お客様、そして社員に対して、何をおいても誠実であることを常に心がけている。

株式会社 TTK

- 所在地：〒984-8558 宮城県仙台市若林区新寺一丁目2番23号
- TEL：022-297-5111（代表）
<http://www.ttk-g.co.jp/>
- 創立：1955年
- 資本金：28億4,700万円
- 売上高：398億円（連結売上高 2011年度）
- 従業員数：872名（連結 2012年3月現在）
- 関連会社：東北通産株式会社、東部電話工事株式会社、北部電設株式会社、盛岡電話工事株式会社、八甲通信建設株式会社、千秋通信建設株式会社、山形通信工事株式会社、福島電話工事株式会社、株式会社TTKテクノ

情報通信の重要性をあらためて実感した復旧作業

いま東北エリアの生活インフラや産業の進展を考えたとき、先の東日本大震災の影響を抜きには到底考えられません。私が2010（平成22）年6月に社長に就任した、そのおよそ8カ月後、この未曾有の大災害が起きました。ことに東北地方太平洋沿岸域の被害は甚大で、当社においても岩手県の宮古にある営業所が津波によりビルごと壊滅し、この地域の拠点を失うなど大きな打撃に見舞われました。

東北地方のライフラインが壊滅状態にある中で、私どもにとっての大きな使命は、災害で途絶した通信設備を一刻も早く復旧することでした。震災被害に加え、福島第一原子力発電所の事故が重なる中、輸送ルートの確保、ガソリン不足や物資不足の中での資材や人材の確保、瓦礫が散乱する現場での足場の確保など、復旧工事は想像を絶する作業となりました。

このような厳しい環境の中、さまざまなところから支援をいただき、また秋田や山形など被災していない地域からの応援もあり、一刻も早い通信復旧をめざして災害対策本部を設置し、一丸となって作業にあたりました。被災地での作業は緊張の連続でしたが、私たちの業務が多くの人のライフラインに直結しているという重要性和責任感、誇りとやりがいを再認識する機会でもありました。

培った技術を活かして新たな事業展開を図る

現在、第3次中期経営計画（平成23～25年度）の2年目にある当社では、事業戦略の重点事項7項目のトップに「震災被災地の情報通

信設備の復旧・復興」をあげています。震災からの復旧・復興事業は現在も当社の大きな事業の柱であり、毎週、本社「復興推進室」と被災3県での情報連絡会を継続して実施し、率先して事業を展開しています。

被災地における復旧・復興事業は、ただ元の姿に戻すというよりも、イノベーションを取り入れた新しい形を創り出していくことが重要で、それがこれからの東北の発展につながると考えています。そして、そこではICTが大きな役割を果たします。例をあげれば、光ファイバーを利用した地方自治体地域情報化（IRU方式^{*}）での住民サービス。いままで十分な医療サービスが受けられなかった地域でも、地域センターと都市部の総合病院をネットワークで結び、遠隔で健康診断を受けられるような仕組みなどがスタートしています。

こうしたICTを用いた革新的なサービスは、技術レベルでは成熟していても、実際の社会環境にどう活かすかはまだまだ実験・検討が必要なチャレンジングな分野。さまざまな可能性を秘めたビジネスの芽があります。この状況を踏まえ、当社では、2011（平成23）年7月にソリューション営業部を発足させ、仙台を中核とした東北全域での事業展開を強化していきます。これからますますニーズが増えるIP・ソリューション分野に積極的に参画し、東北の発展とともに私たちも成長したいと思っています。

さらにこれからのニーズを鑑みますと、必要不可欠なのが環境ビジネスです。実用化が急速に進む太陽光発電はいわば時代の申し子。仙台市内にある自社ビルや青森の八戸事業所にも太陽光発電システムを導入しました。2012（平成24）年7月より余剰電力の買い取りが「再生可能エネルギーの固定価格買取制度」として再スタートしたこともこのビジネスにとっては追い風です。

^{*} IRU（Infeasible Right of Use）方式：NTTなど電気通信事業者が自治体所有の通信設備を、長期にわたり安定的に使用できる権利を持つことができる仕組み

環境ビジネスは、通信やIP・ソリューションとは全く毛色が違いますが、太陽光パネルを据え付ける土台の設置、コンクリートを埋める基礎工事などは、まさに私たちが長年にわたり培ってきた技術が活かせる場です。電柱の設置や、携帯電話の基地局を作る際の技術が応用できる分野だと思えます。

当社は創立から60年近くが経過しました。その間にはチャレンジ精神にあふれた事業展開も行ってまいりました。この進取の気質に根ざして、情報通信のエンジニアリングはもとより、IP・ソリューション、環境ビジネスへと業務の多様化を図っていきます。そして何よりも、震災復興をしっかりと支え、東北の発展とともに当社も成長を加速したいと考えます。

東北の地にしっかりと根づく スキルの高い仕事を

通信の需要という点でいうと、東北エリアは広大な土地の中に需要が点在しているということが特徴です。関東圏や都市部のように人口が密集し、均質に通信の需要がある地域とは異なり、東北は広いエリアの中に集落が点在している地域が圧倒的に多いのです。ですから、通信設備を作る際にも非常に効率が悪く、1ユーザーあたりのコストがどうしても高くなってしまいます。

この状況をどうやって解決し、利益につなげるかが経営上の大きな課題です。解決策として推進しているのがワンストップサービス。同地域に異なった技術を必要とする作業が発生したとき、一人の技術者が複数の技術を有していれば一度で業務が完了し、コスト低減につながります。複合技術を持つ技術者はまだまだ少ないのが現状ですが、ワンストップサービスの充実を積極的に進めています。さらに工事拠点までのタイムロスをできるだけ少なくするために、いままでは仙台で行っていた業務も県域拠点で対応できるよう、各地で技術者を育成し配置する取り組みも数年前から始めています。

こうした技術者の育成は、基本的にはOJTで取り組んでいます。入社後にさまざまな部署をローテーションしながら専門スキルを磨き、種々の業務、技能を習得します。設計にたずさわった後は施工管理に、さらに安全品質…といった具合です。ひとつの業務をあらゆる角度で経験することで、技術の習得はもちろん、他部署への配慮や連携も生まれます。

さらに、チームを組んで作業にあたることで技術の伝承も行っています。東日本大震災での仮設住宅工事などでは、メタルケーブルでの工事が頻繁にありましたが、この業界では技術の進歩が早いので、若手の技術者の中には光ケーブルの知識しかない者も多くいました。それでこの機会にベテランの技術者とチームを作り、業務を通じてメタルケーブルの技術を習得する体制を作りました。

複合的な技術を持った技術者、工事と保守という異分野の技術を双方こなせる技術者など、スキルの高い技術者を育成するのは容易ではないのですが、特に東北ではこうした技術者のニーズが高いといえます。通信の分野に限りませんが、それぞれの地域の特性をよく理解した上で業務に対応するのが経営の基本です。この地域のニーズにしっかりと応えていくために、あらゆる施策を投じていくのが経営者の役目だと考えています。

徹底した「安全と品質」の上に、 人と技術とスピリットを育てて

TTKグループ行動指針に、「わたしたちは、安全と品質を最優先します。」と記載しています。日頃から私が「安全と品質」に非常に重きをおく理由は、事故の影響というものはいのほかに大きく、当事者のケガや器物の損壊など事故そのもののダメージだけでは済まないことがあるからです。事故が起きれば、まず現場の士気が下がりますし、事後処理にも多くの時間とコストを割かなければなりません。そして、何よりも事故が起きたという事実が、お客様の信頼を大きく失墜させることにつながります。

安全の徹底は、現場の第一線で意識し実行できているかどうかを肝要で、従業員が一丸となり一体化した安全への取り組みが必須です。例えば、安全品質の管理部門から現場に注意事項や安全施策を周知しても、現場では実作業との兼ね合いにより、なかなか定着しないものもあります。このような食い違いのもとでは、安全と品質を守ることができません。

まず、管理部門は安全対策の指示を発信して終わり、ではなく、現場にどこまで届いて現場の意識としてどう定着しているかをきちんと把握することが大切です。私もできるだけ作業現場の安全パトロールの回数を増やし、注意を喚起していますが、現場に行かないとわからないこともたくさんあります。「安全と品質」を徹底するために絶対に守らなければならないことがある一方で、現場の実態にうまくマッチングしていない指示事項などは、これを再度現場と擦り合わせながら、確実に現場に「安全と品質」が定着できるように修正していく努力も必要だと思っています。

そのためには、風通しの良い組織を作ることも私の役目であり、風通しの良い組織は社員のモチベーションを高めることにつながります。よく東北人気質として、我慢強い、芯が強い、勤勉などといわれますが、そうした良い気質を仕事で発揮していくためにも、従業員のモチベーションを高める環境作りが経営者として一番大切なことだと考えています。高いモチベーション、高い技術、そして気概が全社に行き渡るような社風をめざしています。



トップは語る こぼれ話はウェブサイトへ
eふぁみり もあわせてご覧ください!

eふぁみり

<http://jp.fujitsu.com/family/honbu/family/>